

第52次日本南極地域観測隊を振り返って（その1）

社団法人日本測量協会

測量技術センター北陸支所 上田 淳一

今年3月20日、4か月に渡る南極での夏期間オペレーションを終え、無事に帰国しました。帰国後すぐ花粉症に苦戦しましたが、南極生活とのギャップにも慣れ、出発前の生活リズムに戻っています。南極大陸からの帰路、数か月ぶりに緑のある大地に上陸できることを心待ちにしていた頃、ニュージーランド地震（2月22日）、更には東北地方太平洋沖地震（3月11日）による甚大な被害により、多数の尊い命が失われました。我々が乗船していた砕氷船しらせでは、隊員は外部とのやり取りを電子メールか衛星電話を利用していますが、インターネットを利用できなかったこともあり日本国内の状況を思うように把握することができませんでした。情報量の少ないことへの苛立ち、焦りの中で家族の安否を心配したこと、特に観測隊員の関係者には被災地の方がおられましたので、一刻も早く帰国したい気持ちを抑え、気をもんでいた姿を鮮明に思い出します。あれから早や4か月が経過しようとしている中、改めて第52次南極観測隊に携わった約一年間を振り返りたいと思います。

南極に向けての準備

第52次日本南極地域観測隊として正式決定されたのは昨年6月でした。その後すぐに夏期訓練が開催され、出発に向けて本格的に観測隊が始動しました。冬期訓練は既に候補者として済ませていて、観測隊の役割、自然や気候、医療体制、雪山訓練等を広く学んでいました。夏期訓練ではこれから苦楽を共にするグループメンバーとの初顔合わせとなり、運命の出会いとなります。メンバーとは出国してから4か月間、オペレーションも食事も酒も、場合によってはテントで寝る時も風呂も、ずっと一緒に行動することになります。



写真1 砕氷船しらせと輸送するコンテナ

顔を合わせない日はなく、家族より濃厚な日々を過ごすことになります。各隊員が行うミッションの訓練は順次進められ、着々と南極に向けての準備が整っていきます。何といても準備で一番大きなウエイトを占めるのは、南極で使う物資の調達と輸送です。燃料、食料、設営機材、観測物資等の物資量の総計は約1,100トンで、その内燃料の割合は約60%になります。予め、大井ふ頭の倉庫に物資を集積しておき、しらせへの積み込みを約2週間で完了させる大仕事になります。倉庫に集積されたすべての物資は、検数・検定協会により重量、寸法、容積及び梱数を詳細にチェックされ、南極へ持ち込む物資リストが作成されていきます。どの隊員もオペレーションに使う物資をもれなく持っていくために必死です。しかし、購入した物資の納品が間に合わなかったり、港への搬入手続きの誤りでしらせに積み込むことができなかったりとトラブルもあったようですが、総括する輸送担当隊員の努力もあり、何とか無事に出発までの準備を整えることができました。

物資には公用品と私物とがあり、公用品はオペレーションに使用する物資、私物は隊員個人の生活で使用する物資に分かれます。私物には衣類や日用品、嗜好品等、自由に持ち込む事ができ（動植物や法律に反するもの等は除く）、各隊員、個性豊かなものを揃えています。それらは航海中大いに活躍し、食料であれば宴会で振る舞われ、ちょっとしたご当地自慢になります。私は富山の地酒を振る舞い（因みに南極観測隊では、独酌するのが慣わしですが・・・）、帰国したら送ってくれと催促がある程の反響がありました。食料以外でも自転車やロデオ型のダイエット器具、冷蔵庫なんかを持っていく強者がいました。オペレーション以外の生活面でも如何に楽しく過ごすか準備を怠りません。これから向かう閉塞された社会環境では、一見遊びと思われることも精神衛生上、重要な役割を果たします。（次号に続く）